

まえがき

いつの時代も戦争が始まると、まず最前線に送られるのは若者たちである。戦局が悪化した昭和十八年十二月、約十万人の大学生が学窓を去り、ペンを持つ手に銃を執るべく軍隊に入隊した。これがいわゆる学徒出陣であり、終戦までに約三十万人の学徒が軍籍に身を置いた。

若者たちは、時代の要請に応え、私情を断ち切って軍服に身を固め、泣きごとも恨みごととも言わず、敵の蹂躪じゅうりんとんから祖国を守るために黙々と戦場へと赴おもむき、その多くが戦野に身をさらした。

ただし学徒出陣自体は日本独特の制度ではなく、アメリカやドイツは日本以上に大規模かつ計画的に学徒の動員を行っていた。その中で日本の学徒出陣がとりわけ悲壮感にあふれるのは、学徒兵の多くが祖国防衛の捨て石にならんと、自ら望んで十死零生の特攻を志願したためである。たとえば海軍の神風特攻隊を例にあげると、士官の特攻戦没者七百六十九名中、学徒出陣の予備士官の戦没者は六百五十三名で、その割合は実に八五％に及んでいる。この数字からも、出陣学徒の壮烈な戦いぶりが理解できるであろう。

彼らの出陣の意義は一体何であったのか。彼らは海軍兵学校や陸軍士官学校を卒業した

いわゆる職業軍人ではなく、その華やかであるべき青春と未来を投げうって、祖国累卵の危機に馳せ参じた。当然、立身栄達などは彼らの眼中にはなく、危急存亡の秋にある祖国日本とそこに住む同胞の平穩を願ひ、殉国の熱い血潮を烈しくたぎらせて軍隊に入り、その多くが非命に斃れた。

彼らは命の尊さというものを誰よりもよく知っていた。知りつつなお他のかけがえのない命を救うために、自分の命を潔く捨てた。この捨て石の精神こそ、人間性の尊嚴の極致の姿であり、この崇高な自己犠牲の精神を悟らずして学徒出陣を語っても、ほとんど意味はない。

戦後、いわゆる進歩派知識人が、彼らの悲壮な死を、犬死だ、無駄死だといって罵倒した。これほど恥知らずな言葉はない。この知識人どもはすべてかの戦争の生き残りである。生き残りなら生き残りらしく分をわきまえ、節を守らなければならぬ。日本男子とはそういうものであり、祖国防衛の戦いに散った死者を冒瀆するなどっての外のことである。たとえば早稲田大学出身の長門良知中尉（昭和二十年十月、バシー海峡にて戦死）はこういつている。

「国に殉ずるということ、戦死するということ——それは何も犠牲といわれるべきものではなくて、ある人間のある時代における生き方——必死の力をこめた生き方そのものである」

出陣学徒の心情とはこうしたものであり、進歩派知識人の安易な平和観なるものが、いかに浮わつた根無し草的なものであるかがよくわかる。平和とは命がけで守るものであり、そういう戦いができぬ者を、男の世界では腰ぬけの卑怯者という。

また京都大学出身の大峽おほさき吉隆大尉（昭和二十年三月、ルソン島にて戦死）はこういつている。

「戦火の陰には、かならず幾多の犠牲の伴うことを忘れてはならない。我々戦地に在る者、とくに自分のような隊（主計課）にいる者は、南の島に散華した忠勇なる将士に謹んで哀悼の意を表すると共に敬虔なる祈りを捧げてやまぬ」

また大峽大尉はこうもいう。
「人間はいつまでも誠実、純でありたい。生死は別問題である。死ぬ時は死なねばならぬ。人間の生命死ぬまで正しく男であることを念頭に置いて、御国のために微力を捧げている」

これは戦いに殉じた学徒兵に共通する心情であり、青春の熱い情熱と深い祖国愛、同胞愛というものが、この言葉からものはつきりと読みとれる。起つべき時に起ち、死ぬべき時に死ぬのが武士道の道統であり、大峽大尉も出陣学徒として見事にこの道統を受け継いでいたことがわかる。

軍人は死の職業であり、学徒出陣した若者たちの中でも覇気ある者は、死をもつとも親しい隣人とする飛行科を志願した。彼らは一瞬一瞬を死との対決とする猛訓練を経た後、その多くが九死に一生を期し得ぬ、いわゆる十死零生の特攻を志願した。

その彼らが本格的に特攻出撃するのは、昭和二十年の春、沖繩決戦が展開された後であ

るが、この大戦が哀切な詩情を醸し出すのもこの時期からである。

たとえば昭和十八年の秋に各大学を繰り上げ卒業して海軍に入団した第十三期飛行予備学生の遺書・遺稿を集めた『岡山出身海軍飛行予備学生』（白鷗会岡山支部編）には、次のようなレクイエムが載せられている。ちなみに飛行予備学生の戦没者二千四百五十四名中、第十三期生は千六百七名を占め、比率でいえば実に六五％である。

「若者たちは決して血気にはやつて戦ったのではない。彼は直面せられた運命に、現実には忠実だったのである。」

若者たちはいくさを誘発した政治を云々する時間はない。彼らはいくさが現実であり、青春だった。たちあがるのが若者たちの運命であった。

若者たちは、男だった。胸の煩悶を無心をよそおった顔でかくし、敢然とたちむかった。彼らはおのれの現実を忠実に生き、戦い、そして散った」

男には避けては通れぬ戦いがある。祖国防衛の戦いが、それである。この戦いが始まった限り、いかなる思想や信条を持つとも、この世への未練をスラリと断ち切って銃を手に執り、命を的に戦い切るのが、日本男子の面目というものであった。ここで死力を尽して戦わねば、男子として生まれてきた甲斐がない。

レクイエムはつづく。

「若者たち学生たちは海軍上層部の期待以上に、見事に短期間で錬成された。若者たちの愛国の熱情が結実したのが、学生たちが器用であったのか、飛行機を乗りこなす

ことも、銃を撃つことも、兵学校出身者に優るとも劣らなかったのである。

だが、予備学生たちは明らかに消耗品であった。戦局の逼迫、戦略の必然であったのかもしれないが、激戦を予測される第一線には、必ず予備学生出身者が配置されていた。

若者たちは黙って散っていった」

予備学生は約一年間の訓練を終了すると、晴れて少尉に任官する。歴とした士官の誕生である。兵学校生徒も卒業と同時に少尉となるが、こちらは職業軍人として将来の立身栄達を約束されたエリート士官であり、一方の予備学生は少尉に任官しても、いわゆるスペアの予備士官ではない。

だが彼らは実によく戦った。神風特攻で散華した予備士官の割合が、特攻戦没全士官の八五％にもなるという先の数字を考え合わせれば、予備士官たちは兵学校出身者に遜色がないどころか、こと特攻に関するかぎり、兵学校出身者をはるかに凌駕する働きを見せており、スペアどころの話ではない。彼らの存在なくして特攻は語れないのである。

そしてこのレクイエムは次の一節で締められている。

「四五年（昭和二十年）二月以降、予備学生出身の少尉たちは本格的に戦列に加わった。速成の少尉たちは、最前線ではじめて敵と撃ち合いをやったとき、戦いの現実を目を見開き、『負けられない』と肝に銘じたのである。いくさの最前線に駆り出されていた若者たちには、日本の敗北はさげられない現実として見えていた。」

しかし、このいくさで勇戦奮闘した予備学生の多くは冷静に、「特攻」を志願した。いくさへの懷疑を捨てきれない者も、生命への夢を忘れきれない者も、こぞって一歩前に進み、「特攻」を志願した。いくさの最前線で、若者たちの心情は、勇猛であり至純であった」

特攻隊員の心情を象徴する言葉に「熱願冷諦」がある。彼らは何を熱く願ひ、そして何を冷たく諦めたのか。この壮烈にしかつまた哀切な心情がわからなければ、特攻を論じて意味はないし、また論ずる資格もない。特攻とは疑いなく、戦火に咲いた哀切な詩情なのである。いみじくも、特攻隊員として奇蹟の生還を遂げた東京大学出身の内藤祐次少尉は、出撃待機の合い間に、

「戦争は人間に力を発揮させ、戦闘は俺達に詩情を与えてくれる」

と日記に書き留めたが、ある意味で特攻隊員は皆、この凜烈かつ清冽な詩情の中で生死したのである。古来、日本男子はその生涯を一編の詩とせねばならぬとされているが、特攻隊の若者たちは疑いなく後世に一編の詩を残した。ただその詩情はあまりにも哀切にすぎ、読む者の心を今なお強く締めつけてやまない。

本書は学徒出陣の今日的意義を明らかにすることを目的としている。従来、学徒出陣という、雨の神宮外苑競技場の悲壮な分列行進や凄絶な特攻出撃ばかりがクローズ・アップされてきたが、本書では学徒出陣の全体像を把握するため、第一章の「最後の早慶戦」で平和であることの尊さを説き、第二章の「学徒出陣」で日米決戦に向けて己れの精神と

肉体を鍛えに鍛えた出陣学徒の決意と努力を描き、第三章の「六大学の勇士たち」で、特攻隊として出撃散華した若者たちの至純の魂を追求した。

戦争最末期に日本の最後の切札きりふだとして戦場に立った学徒出陣の若者たちは、祖国累卵の危機に際して、特攻という世界史にも類例のない凄絶な戦法をもって圧倒的に優勢な敵と戦い、その多くが非命に斃れた。しかし彼らの死は決して犬死でもなければ無駄死でもなかった。

祖国日本とそこに住む愛しい人々を守るべく、彼らは自らを捨て石と位置づけて、命のかぎりに戦った。その自己犠牲の崇高な精神は人間性の尊厳というものを考える時、未来永劫、つねに語り継がれてゆくに違いない。ペンを持つ手に銃を執って祖国のために潔く戦い散った彼らの死は、平和の尊さというものを世界史に鮮明に刻みつけた。

その意味で彼らの死は、洋の東西を問わず、かの大戦争に生き残った人々のみならず、その後裔として現代に生きるすべての人々にとっても、かけがえない命の記録となったのである。

北影雄幸